
水餃子

蒼井りゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水餃子

【Nコード】

N4687M

【作者名】

蒼井りゅう

【あらすじ】

いつもは料理なんかしないわたしが急に気が向いて料理し、彼と食事するひととき。なにげない、ほのぼのした日常風景。

その瞬間が見たくて、わたしは頬杖をついて、正面に座る彼を見つめる。

水餃子は彼の好物だ。普段はほとんど料理をしないのに、今夜、ほんの気まぐれで、わたしは水餃子を作った。

スープの表面に散らされた刻み葱の緑が、視覚的にかなり効果的。澄んだスープは、底にいくにつれて白く濁っている。具を詰めすぎた水餃子も、そのスープに浸かるとやがて出で、かなりおいしそうに、上品に見えていた。湯気は料理ベタなわたしの味方で、食欲をかきたてる。

彼が、スープの中に白いれんげを無造作に沈めた。

「熱いよ」

無頓着に、れんげですくった水餃子の一つを口に放り込もうとして、彼は手を止める。

「ほんとだ。すっぱー、湯気」

小さなれんげの上にたつ湯気に、彼は目を輝かせる。それから彼は大きく息を吸い込むと、バスデーケーキのキャンドルを吹き消すときのように、ふうっ、と水餃子に息を吹きかけた。彼の起こした風は、わたしの鼻に水餃子の匂いを届ける。ほんのちよっぴりだけ、彼の幸せな匂いが混じっている。

でも、彼が熱々の食を冷まそうとしたのは、その一回きりだ。

「えっ、もう食べちゃうの？」

「だって早く食いたいじゃん」

そう言いながら、彼は水餃子を口に運ぶ。

湯気ごとれんげが彼の唇にのみこまれる、その瞬間に、わたしはどきどきする。火傷も心配だけれど、もっと別な理由からだ。おはしでもフォークでもなくて、彼の口がれんげを含んでいる姿は、ど

うしてか、妙に色っぽい。

熱さを克服し、水餃子をほおばった彼がわたしを見る。わたしを見ながら、それをゆっくりと咀嚼する。わたしは彼を見返し、満たされた気分になる。

「……うん、うまいよ。おまえも食べたら？」

うん、と返事はしたもの、二個目に伸びた彼の手の中にあるれんげを見て、わたしはそっと息を止める。

彼はれんげをスープにつけて少し迷ったあと、底に沈んでいた水餃子をすくい上げた。今度は、彼はそれに息を吹きかけず、まっすぐに口に運ぼうとする。

れんげが彼の口に今まさに吸い込まれようとしたとき、彼の唇が微笑みを形作った。

「おまえさー、今度はハンバーグ作ってよ」

わたしが彼の口元から目を転じると、彼がさらに深く笑った。

「いいけど、わたし、あんまり料理得意じゃないよ？」

「そんなことない。これがウマイんだから、ハンバーグも絶対ウマイって」

「そうかな？ たしかに、同じひき肉料理だから……あっ！」

わたしが大きな間違いにやっとのことで気づいても、彼は素知らぬ顔だ。

彼は、水餃子を口の中に入れる。その色っぽい唇でれんげをくわえたまま、彼はわたしを見て、幸せそうに笑う。

……豚肉のかわりに牛肉使っちゃったけど、まあ、いっか。

彼がれんげで食べる姿も見られたし、彼が、笑ってくれたから。

(後書き)

読んでくださって、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4687m/>

水餃子

2010年10月10日05時25分発行